

The Mother-Child Bonding in Pregnancy, Childbirth, and Postnatal: An Ethnographic Study of Birthing among Sasak People in Lombok

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2019-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00054803

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



学 位 論 文 要 旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名

Dissertation Title

The Mother-Child Bonding in Pregnancy, Childbirth, and Postnatal: An Ethnographic Study of Birthing among the Sasak People in Lombok

(和訳または英訳)

Japanese or English Translation

妊娠・出産・産後における母子のつながり：ロンボク島ササク人の産むことに関する民族誌的研究

人間社会環境学 専 攻 (Division)

氏 名 (Name) 棚田 早紀

主任指導教員氏名 (Primary Supervisor) 鏡味 治也

(注) 学位論文要旨の表紙

Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

ABSTRACT

Drawing on my anthropological fieldwork in Lombok Island, this paper aims to illuminate the Sasak women's perspectives of bonding in pregnancy, childbirth and postnatal and the social significance of the healing practices in contemporary rural Indonesia.

In the former half of this paper, we will see the general background of the shifting birth settings in Reragi village (pseudonym) in East Lombok (Chapter 2), the Sasak concepts of being, spirits, and things (Chapter 3), and the rituals and treatments in pregnancy, childbirth, and postnatal (Chapter 4). In the latter half, we explore specific cases in which women cope with pains of maternity in the critical moments of birth, sickness and losses as well as in everyday lives (Chapter 5).

This ethnographic study discusses three primary questions (Chapter 6). First, situated in the shift of birth settings from traditional midwifery to modern medicine, how do women in Reragi village acquire and value the local healing practices? Second, how do the birthing mothers and people surrounding them understand the relationship between pregnant women and the unborn as well as the one between postnatal women and their children? Finally, how, and for what purpose, do the women in Reragi continue turning to the ancestral notions of illnesses and healing in the contemporary context of medicalization of childbirth?

Based on the village women's voices about their experiences of birthing, I argue that people in Lombok perform the local rituals and treatments of pregnancy, childbirth, and postnatal as the essential effort to nourish the whole of the baby's being. In such aspect of the daily cares, the mother-child bonding is equivalent not to the formation of the attachment between individuals but to the existence of a dimension of the partly shared bodies of the persons.

Keywords: body; childbirth; healing; Indonesia; Lombok; materiality; postnatal; pregnancy.

論文要旨

この論文はロンボク島における人類学的フィールドワークに依拠し、妊娠・出産・産後における母子のつながりに関するササックの女性の視点および現代インドネシアの地域社会における治癒実践の意義を明らかにしようとするものである。

本論前半では、ロンボク東部のルラギ村（仮名）の概要と現地での出産環境の変化(第2章)、人間存在や霊、モノにまつわるササックの概念（第3章）、妊娠・出産・産後に関わる儀礼習慣や手当て(第4章)に目を向ける。後半では、毎日の暮らしや分娩・病気・喪失の重大な局面において女性たちが出産をめぐる痛みに対処する様相を具体例から検証する(第5章)。

この民族誌的研究は、三つの主要な設問に取り組む(第6章)。第一に、従来の産婆術から近代医療へのお産環境の変化において、ルラギ村の女性たちはどのように土着の治癒実践を受け入れ、価値づけているのか。第二に、産婦とその周りの人々は妊婦と胎児、産後の女性と子どもの関係をどう解釈しているのか。第三に、出産の医療化という現代的文脈において、どう、そして何のためにルラギ村の女性は先祖由来の疾病観・治癒観を拠り所とし続けるのか。

お産経験にまつわる村の女性たちの声に基づき、筆者はロンボクの人々が妊娠・出産・産後にかけての地域の儀礼習慣や手当てを子どもの存在そのものを滋養するために必要な努力として取り組んでいることを主張する。日々のケアのこのような側面において、母子のつながりは個人間の愛着形成としてではなく、部分共有された人間身体の一次元として存在するに等しいのである。

キーワード：インドネシア，産後，出産，身体，治癒，妊娠，マテリアリティ，ロンボク。

学位論文審査報告書

平成31年 1月28日

1 論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専攻 人間社会環境学専攻

氏名 棚田早紀

2 学位論文題目（外国語の場合は、和訳を付記すること。）

The Mother-Child Bonding in Pregnancy, Childbirth, and Postnatal: An Ethnographic Study of Birthing among Sasak People in Lombok

（妊娠・出産・産後における母子のつながり：ロンボク島ササク人の産むことに関する民族誌的研究）

3 審査結果

判定（いずれかに○印） ☒合格 ・ ☐不合格

授与学位（いずれかに○印） 博士（社会環境学・文学・法学・経済学・☒学術）

4 学位論文審査委員

委員長	鏡味治也	㊟
委員	西本陽一	
委員	森 雅秀	
委員	轟 亮	
委員	田村うらら	
委員		

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

5 論文審査の結果の要旨

本論文はインドネシアのロンボク島に居住するササク人の生活を対象に、その家庭での妊娠から出産、そして産後の育児期に至る一連の過程で母親が、生まれてくる、そして生まれた後の子供とのつながりをどのように経験して生きるのかを、一村落での長期にわたる観察・聞き取り調査から検討しようとしたものである。筆者は、母親たち自身の出産・育児経験のとらえ方やそこに見出す意味を詳細に論じるのみならず、他の家族成員や医療関係者の行動や意見、また結婚から妊娠、出産に至る通過儀礼にも頁を割いて詳しく記述し、出産前後の母子の関係を総合的に理解しようと努めている。

第1章では問題設定のあと、母子関係に関する人類学研究を概観し、古典的には出産は伝統的世界観の中に位置づけられて論じられてきたが、女性の主体性を主張するフェミニスト人類学の影響で、医療人類学によって母子の健康衛生に関心が寄せられるようになり、しかしそれでも受け身の患者として扱われがちで、母親の経験する生きた現実がじゅうぶんに論じられていないので、本論はそれを中心に検討するとする。そして哲学論文に載る母親のコンテナー・モデルでは母子がはっきりと区別される二つの個人であるのに対して、ロンボク島の母親の意識では母子は妊娠時のみならず出産後も切り離せないつながりを保持して生きているのではないかと想定し、その検証を目指すとする。

第2章は調査地の概要説明で、ロンボク島及びその先住民であるササク人の紹介のあと、調査地とした一村落の概要と住民の宗教信仰等を概説する。そして村での医療環境について、1984年に村に保健診療所が開設されて以降、近代医療の普及が始まり、それまで伝統的な産婆の助けで家で出産していたのが、しだいに保健所の検診に通い診療所や病院で出産するケースが増えてきている事情を描写している。

第3章はこの世に存在するものについてのササク人の観念を検討し、彼らはこの世を見える世界に見えない世界が貼りついて玉ねぎのようなものとしてとらえていると紹介し、その見えない世界に住む死者や祖霊、悪霊などと生きている人間との交流を、死者の霊に出くわすことで生じる（と信じられている）病気の例などから検討している。またそうした見えない存在との交渉を司る術や呪師についても紹介している。

第4章ではササクの人々が行ってきた結婚から妊娠、出産、そして産後に至る節目の通過儀礼を、具体的な観察事例を挙げて詳細に記述している。とくにこの一連の儀礼で重要な意味を

担う、新婦の母親が織って与える妊婦帯に注目し、それが妊娠7か月の儀礼で織り端を切られて妊婦の腹に巻かれる腹帯になり、産後も腹に巻かれ続けて母親の腹部の回復を助けることを指摘している。

第5章が本論の中心で、50人に及ぶ妊娠・出産経験者（流産・死産を含む）のほか、6人の呪師、3人の伝統産婆、3人の近代産婆、2人の看護師、1人のイスラム教指導者への聞き取りをもとに、妊娠・出産・産後において母子のつながりがどのように経験されているかを論じる。まずいっとうやって生命が宿り、いつから人間とみなされるのかについての産婆や医師、イスラム教指導者など様々な立場からの説明を紹介した後、若い母親たち自身はどう表現しているかを検討し、その多くは胎児の鼓動や動きをおなかの中に感じた時に自分と別の存在がいることを実感するとする。母子のつながりについては、おなかの中の存在と自己は食べ物を通じてつながり、つわりが胎児の要求を表すと受け取られていると母親は語り、まわりの家族もそれを支持する。つわりは父親にも生じ（擬娩）、家族は丁寧にその胎児の要求に対処する。生まれた後も母親は子供を「自分の放出した便」と表現し、いぜん自己の一部かのように気持ちや身体状態がわかるという。

これら母親はすでに近代医療の存在を当たり前のように受け取りその処方に従う一方で、伝統的な観念である霊の存在やその及ぼすとされる影響についても完全には否定せず、自らの母親ら上の世代の忠告に従って腹帯をまいたりまじないを受けたりもする。彼女らの母親は自宅を出産した最後の世代であり、若い母親は自分の母親世代の考えも受け入れることで、自らの子供を母親（子供の祖母）を含む家族、そしてそれをとりまく村人の関係性の中へ産み出すのだと論ずる。

以上の論点は第6章でもう一度整理されて検討され、2体の個人からなるコンテナ・モデルに代わり、母子が食べ物のやり取りを介して一部でつながるホリスティック・モデルが提唱されるとともに、伝統的世界観への依拠は新たに生まれた子供を周りの社会に調和的に受け渡すだけでなく、近代医療が完全には対応できない不慮の病気や流産といった事態に説明を与え慰みを用意する役目も果たしていると、流産経験者の言葉を引きながら論じている。

通算で1年にわたる滞在調査での観察・聞き取りをもとに、儀礼や病気、また妊娠・出産の具体事例が筆者自身の観察と村人自身の言葉をもとに詳細に記述され、民族誌研究のさほど多くないササク人の、それも妊娠・出産経験という民族誌的記述の少なかった事象の報告として本論の価値は高い。村社会の構造や活動の記述がやや薄いのが、世界観や人間観から通過儀礼、

霊との遭遇による病の観念や伝統医療・伝統産婆と近代医療のかけひきを背景に、母親たちへの詳細な聞き取りから描き出す妊娠・出産経験のとらえ方と意味付けは、じゅうぶんな迫真性と説得力をもつ。

他方で、これだけの聞き取りデータをより丹念に比較分類するなどして分析すれば、まだ何か引き出せるのではと思えるのも否めない。また生まれてくる子供に対する夫（父親）や祖母の関与も、どの社会でも見られる一般的な家族関係のそれと大きく違うものではない。伝統的世界観と近代医療観念の共存についてもしかりである。

しかしインドネシア・ロンボク島のイスラム教徒ササク人の妊娠・出産という事象を、その民族的世界観やイスラム教の理念から説明して済ませるのではなく、実際にそれを経験した若い母親たち自身の言葉でもって、生きられた現実として記述し提示した価値は少しも損なわれるものではなく、博士学位論文の水準をじゅうぶんに満たすものと審査委員一同判定した。

以上